

## NHO 女性医師の活躍

NHOで活躍する女性医師の  
スペシャルインタビュー

INTERVIEW.

# 01

### 出産、子育て、介護などで 医師としてのキャリアを諦めないために

富山病院 院長 金兼 千春

と協力しながら成人の病気を診療する機会も多く、幅広い診療能力を自然と習得できる環境にあります。

さらに当院は、富山大学附属病院と距離的にも非常に近い関係であり、大学からの派遣医師や非常勤医師も多く、最新の医療知識を吸収できる環境にあることも特徴的です。

私は長年、当院に務めています。各科、各部署間の風通しが非常に良く、相談や意見、要望が言いやすいことも魅力であり、院長として現場の声が拾いやすいことは組織運営に大いに役立っています。

#### 両立に大切なのは 優先順位をつけること

私は子育ても、親の介護も経験しましたが、子育て、家庭、仕事の両立を維持することができたのは、今何を一番するべきかを具体的に洗い出し、優先順位をつけたことです。これによって効率化を図ることができ、心に余裕が生まれました。完璧に両立をすることは無理であり、当然、諦めなければならないことや失敗も経験するでしょう。しかし、自分ができる範囲で一生懸命に家庭のことや仕事をしている姿を、子どもたちや仕事仲間もしっかり見ていますし、理解もしてくれるはず。また、子育てとの両立によって得られた優先順位や時間配分のスキルは、その後の仕事に大きく活かすことができるでしょう。

残念なのは、それまで一生懸命勉強をしていたのに、子育てを始めると諦めてしまう人がいることです。確かに子育ては大変ですが、合間にほんの少しでも勉強し、新しい知識を取り入れることをしてください。

子育てが一段落してから復帰しても決して遅くはないですし、ほんの少しでも勉強しておくことでモチベーションを保つことができ、復帰もしやすくなるでしょう。



女性医師は医師と結婚している方が多く、男性医師が仕事で忙しいほど、女性医師の家庭における比率は高まります。最近、男性医師の育休取得者も出てきていますが、男性医師の働き方改革が進むことで、女性医師の活躍の場も広がってくと感じています。

院長として、子育て中の女性医師に対するバックアップ体制はもちろん、女性、男性に関係なく、一人ひとりの医師が働きやすく、その人の強みを伸ばすことのできる環境づくりを目指していきたいと思っています。



#### PROFILE

出身地 : 石川県金沢市  
出身大学 : 金沢大学(1988年卒)  
宝物 : 二人の娘  
座右の銘 : 強くなければ生きていけない  
優しくなければ生きていく  
価値はない

#### ■ 今までの勤務歴

- 1988.4 金沢大学病院 小児科入局 研修医
- 1989.4 国立金沢病院 小児科 研修医
- 1990.4 金沢大学病院 小児科 医員
- 1991.4 国立療養所富山病院 小児科 医師
- 1993.4 金沢大学病院 小児科 医員
- 1995.4 米国FDA, CBER, Visiting Scientist
- 1997.4 八尾総合病院 小児科 医師
- 1998.4 国立療養所医王病院 小児科 医師  
金沢大学協力研究員(～2018年)
- 1999.4 国立療養所富山病院 小児科 医師
- 2001.4 国立病院機構富山病院 アレルギー科 医長
- 2018.4 国立病院機構富山病院 診療部長
- 2019.10 国立病院機構富山病院 特命副院長(診療部長兼任)
- 2020.4 国立病院機構富山病院 院長

#### 重症心身障害者(児)への 在宅支援に尽力

2020年4月から「富山病院」の院長を務めさせていただいています。

当院は、小児慢性疾患医療、慢性呼吸器、結核医療、重症心身障害児(者)の医療・療育が特徴であり、在宅での重症心身障害者の方のための短期入所事業(ショートステイ)を30年以上前から続けるなど、セーフティネットといわれる分野で富山県の医療を長年にわたって支えています。

私自身もアレルギー科を開設して院長を務めながら、重症心身障害者病棟の主治医としても働き、日本の医療課題の一つである重症心身障害者への在宅支援にも尽力してきました。

当院は患者さんとの距離が近い地域に根差した病院であり、患者さん一人ひとりの思いや価値観を大事にした医療を提供しています。常勤医師の多くは、専門外の幅広い診療にも対応していることが特徴であり、小児科では重症心身障害児(者)も診ているため、内科や外科



「千葉医療センター」の勤務が  
きっかけで病院経営を学ぶ

2020年4月に「千葉医療センター」から「下志津病院」に異動し、7月より院長を務めさせてもらっています。

当院は、専門診療（リウマチ・膠原病、関節外科、神経・筋疾患、小児アレルギー・膠原病、発達障害など）、地域医療（地域包括ケア、小児救急など）、政策医療（重症心身障害、筋ジストロフィー症）という3本の柱があり、急性疾患から回復期、一般診療から専門診療と、幅広い医療を展開していることが特徴です。また、臨床研究、学会発表、教育にも力を入れ、常に医学的水準の向上に努めています。

私が、以前は考えもしなかった院長という大役を拝命することになったのは、医師である夫の転勤により千葉県に引っ越し、「千葉医療センター」に就職したことがきっかけです。



勤務当初は、3年後に開業するつもりでしたが、上司の開業時期と重なったため断念しました。その後、教育研修部長として効果的な初期臨床研修の推進、内科・外科専門研修プログラムの立ち上げ、感染・安全・倫理など全職員向けの研修整備を行い、統括診療部長になっ

てからは、診療部全体の問題解決や、DPC、クリティカルパス、入退院支援、地域医療連携などに尽力してきました。

こうして病院全体のことに関わるようになり、病院経営を学ぶため千葉大学の「ちば医経塾」を受講することに。そこでの勉強をベースに「千葉医療センター」の斎藤院長や、「下志津病院」の石毛名誉院長の傍で実地に学ばせていただき、2020年7月より院長に就任しました。

個々のニーズに応え、誰もが  
働きやすい病院を目指す

私は、大学卒業の年に結婚し、2人の子どもを育てながら筑波大学や関連病院で働き、小児科専門医を取得しました。その後、夫の転勤に伴い、フィラデルフィア市、横浜市、つくば市、千葉市と転居しながら、その時々で勤務場所を探して働いてきました。

仕事と子育ての両立で大変だった当時、「働く母親たちが危ない（バーバラ・J・バーグ）」という本を読んで、両立によって何が犠牲になることに罪悪感を抱えるのではなく、新たな価値観を受け入れ、しなやかに生きることが大切であることを教えられました。また、米国から帰国後、やっと決まった就職先の院長から教わった、「一隅を照らす」（自分の置かれた場所で、目の前を精一杯やっていく、それがそのまま周りを照らすことになる）という言葉は、その時々の仕事に満足感を覚えられるようになり、肩の力が抜けて気持ちに余裕が生まれま

した。女性医師として苦労もありましたが、現在、とても女性が働きやすい社会になったこと大変感謝しています。

私は、職員のみなさんが働きやすく仕事にやりがいをもってこそ、患者満足度を高めることができ、その上に健全経営があると考えています。出産、子育てのある女性医師のキャリアプランが実現できるよう個別のニーズに応えることはもちろん、全ての職員が働きやすく、やりがいをもてる病院を目指し、尽力していきたいと思っています。

この先、AIに代表されるように技術の進歩は飛躍的に進み、社会も医療も大きく変化していくことでしょう。働き方も多様化し、活躍のチャンスも広がるなかで、若いみなさんには自分の信じる道を精一杯進んでほしいと思います。



PROFILE

- 出身地 : 神奈川県川崎市
- 出身大学 : 筑波大学 (1984年卒)
- 趣味 : ウォーキング、  
美術鑑賞、料理
- 宝物 : 下志津病院の全職員
- 座右の銘 : 一隅を照らす



■ 今までの勤務歴

- 1984.4 筑波大学および関連病院で研修
- 1990.7 夫留学に伴い家族で渡米  
フィラデルフィア小児病院で研修  
帰国後、横浜市、つくば市などの  
総合病院小児科で勤務
- 2007.4 千葉医療センター 小児科 勤務
- 2010.8 千葉医療センター 小児科 医長
- 2015.4 千葉医療センター 教育研修部長
- 2019.4 千葉医療センター 統括診療部長
- 2020.4 下志津病院 統括診療部長
- 2020.7 下志津病院 院長

INTERVIEW.

02

しなやかに生きる力で  
仕事も子育ても楽しむこと

下志津病院 院長 重田 みどり